

芥川龍之介の『疑惑』

見 尾 久美恵

一

「白」「闇中間答」「菌車」など、芥川晩年の小説には、倫理上の罪を犯した人間が、罪の意識に責め苛まれて、告白し懺悔をするという形をとったものが多い。それは芥川自身の生への懺悔そのものであり、死との対峙にはかならなかった。「白」のように懺悔によって浄化し得ることができるといふ作品もあるが、結局、彼自身は自裁という形でしか決着をつけることができなかつた。懺悔による功徳など、もはや見出せぬところにあつたのであろう。

小論で取り上げる『疑惑』（大正八年七月一日発行「中央公論」第三十四年第七号を初出とする。）は、人間に潜在する罪を、
「我々人間の心の底に潜んでゐる怪物」として显示する。明治二十四年十月二十八日に起きた濃尾の大地震において、妻を亡くした中村玄道という男が、地震の際の顛末を実践倫理学者である「私」を前に、むしろ背後にある楊柳観音を偲み見ながら告白するという形態をとっている。大地震という凶変により、妻は梁の

下敷きになり身動きできない。懸命に助け出そうとするのであるが、迫る火の手を前に玄道は妻を己の手にかけて殺してしまう。その時点では、生きながら火に焼かれて死ぬよりはと判断したはずであつた。ところが、震災後、殺す為に殺したのではないかという疑惑にかられ、ついには人生を棒に振つてしまふ。そのような玄道の心理と生き様を描き、最も凄惨で重い罪を問題にした作品と見ることが出来る。そこには浄化も自裁もなされない暗い生が描き込んでいるのである。

小論では、芥川が地震の描写に際して参考にしたと考えられる『風俗画報』の紹介を行い、この作品の着想の原点について検討する。更に、芥川の内部に存在する罪意識における『疑惑』の位置についても考察を加える。

二

『疑惑』における地震の描写には卓越したものがあつた。そのリアリティの根拠は、芥川自身が作品の中で示唆しているとおり、



富岡永洗面「鎌倉圖」

渡尾の地震を克明に伝える『風俗画報』にあると考えられる。

『風俗画報』（東京東陽堂発行）は、大地震の起きたその年の十一月三十日（第三十五号）及び十二月十日（第三十六号）発行のものを「震災記聞」として特集している。「疑惑」の中では、震災後一年余りたつて玄道の再婚話も纏つた中、偶然立ち寄つた本屋で、玄道自身にその「風俗画報」を手になせる。「一家の老若が、落ちて来た梁に打ちひしがれて惨死を遂げる画」、「土地が二つに裂けて、足を過つた女小供を呑んである画」、「長良川鉄橋陥落の図」、「尾張紡織会社破壊の図」、「第三師団兵士屍体発掘の図」、「愛知病院負傷者救護の図」と、当時の光景をありありと伝える絵を目の当たりにした玄道は、再び当時の記憶の中へ引き込まれてゆく。そして、最後に見た一枚が、黒煙と火の粉がもうもつと舞う中で、「落ちて来た梁に腰を打たれて、一人の女が無惨にも悶え苦しんである画」であった。その絵は、まさしく妻の最期を想起させるものであった。これによって、それまで漠然と心を支配していた事件への悔悟が、「妻殺し」という疑惑へと変化したのである。

二冊の『風俗画報』を見ると、震災の凄惨さを巧みな絵と記録文で余すところなく伝えている。巻頭に掲げられた富岡水洗の「被害図」を掲載する。「疑惑」の中で、「表紙をはぐつて……まづ先に一家の老若が、落ちて来た梁に打ちひしがれて惨死を遂げる画」と記されたものであろう。そのまま無惨に死んでいる者、

助けを求めて足掻く者。そして、まるで玄道が最後に見た一枚のように、梁の下敷きになつて助けを求めぬ女や、梁の下の子供の手をあらん限りの力で引いている男の姿が描かれている。この地獄のような光景に芥川は動かされ、「疑惑」という作品を生み出すきっかけを得たのではなからうか。玄道が本屋の店先で『風俗画報』を手にした時、「それだ。それだ。」と何物かが囁き、更に、玄道に「では何故お前は妻を殺した事を口外する事が出来なかつたのだ。」と問い詰めてくる。これこそ、芥川の原罪意識に、「風俗画報」の絵が訴えかけてきたことではなからうか。

掲載の図は白黒の縮小コピーである。実物はB5版の見開きに描かれた縦21・5cm横31・5cmの絵で、緑や朱の色彩が施されている。あまりに生々しく写実的な絵には遠くないが、黒煙・火焰・瓦などを吹き散らすことで、一枚の絵の中に、左上の光景のような別の場を描くことが可能になっている。左上の足首と男が子供の手を引いている部分は、臨場感と切実さを伝える。この一枚は、地震による悲劇を象徴したところがある。

次に、地震の描写にあたり、参考にしたかと思われる記事を掲げる。

尾張名古屋の地震の時刻は午前六時三十八分五十秒にして：
（中略）……その響き恰も千山万嶽の一時に崩れたる如く凄じき響きして見る／＼家潰れて瓦雨の如く飛び散り碎け落たる壁は煙の風に靡くが如く暫時は物色をも弁せざりし程なれば遠近に

老幼の悲しみ号び泣き哭する声四方に起りて親は子を救ふの暇なく夫は妻を助くるの隙あらざれば我勝に先を争ひ遁れ出で、却て瓦に頭を砕く者あり座して生を全ふする者あり忽ちにして市内に百八十一名の死者と八百一名の負傷者を出し家屋の倒潰せるも半、全潰にして四千四百余戸に及ぶ初震（ついで）も時々震動歇まざるより十六万の市民は周章狼狽爲す所を知らず街頭に小屋を掛け……（以下略）

（第三十五号十頁「名古屋震災」）

この震災は、何らの徴候もなく、瞬時にして日常を破壊し、人命を奪うものであったようだ。この地震が、午前七時前という、一日の始まりの時間に、人々の日常を急襲したことも見逃せない。この「風俗画報」の記録文にも、朝食の前後に地震が起こったことを述べている被災者の声が随所に見られる。これが、「疑惑」では次のように描写されている。

十月の二十八日、彼是午前七時頃でございませうか。私が井戸側で楊子を使つてみると、妻は台所で釜の飯を移してゐる。その上へ家がつぶれました。それがほんの一二分の間の事で、まるで大風のやうな凄まじい地鳴りが襲ひかかつたと思ひますと、忽めきめきと家が傾いで、後は唯瓦の飛ぶのが見えればかりでございます。私はあつと云ふ暇もなく、…（中略）…目の前にあるのは私の家の屋根で、しかも瓦の間に草の生へたのが、そつくり地の上にひしやけて居りました。

瓦の間に草が生えたままの状態で地上に落ちた屋根という表現は、均質化した日常生活の瞬時の崩壊を、極めて単純化しながら痛烈な形で描写している。そして、梁の下敷きになって悶え苦しむ妻と、側にいながら何もなす術のない錯乱状態の夫という急場が設定される。これは、この「風俗画報」から着想を得たものと考えられるのである。

濃尾の大地震の際、人々は、嘗て安政年間に起こった江戸の大地震を想起している。その規模と被害は、安政二年十月二日以来の大地震であり、折しも三十七回（三十六年目）に相当する。新聞等でも二つの地震の規模を比較した記事が見られた。『風俗画報』では、参考として花見處士の「安政江戸地震記事」を載せている。そこには、地震という凶変なくしては起こり得ない異常な逸話が語られている。その一部を次に抜粋してみよう。

…：逆後れたる人々は、梁（はり）に圧（おさ）れ棟（むね）に繫（ひ）たれ死する者数を知らず猶も哀（あは）れなるは壊（こ）れ落ちたる木材に身を挟（はさ）まれて逃る、こ（こ）と能（あた）はず親族其傍（かた）に在りて援（たす）け出さんとすれど力足らで如何（いか）せまじと悲（かな）む程に炎煙（えんえん）地を巻き来り迫りて遂に看（み）すく（み）猛（ま）火（か）に焚死（やきし）さる最惨然（さいぜんぜん）なる有様余所の袖（そで）さへ濡（ぬ）れぬべし……（以下略）

（第三十五号 二十六頁）

大震ほど瞬時に日常を崩壊し、人間の無力さを痛感させる天災もなからう。ここには、落ちてきた木材に挟まれて、生きながら焼

かれる肉親を目の当たりにせざるを得ないという惨状が語られて
いる。

……山口秀平てふ藩士は落来る。梁の下に右の腕を圧着されて引抽く可き様も無ければ人々下り合ひ助けてたべと声の限り呼はれども皆周章惑ひて誰有りて聞付くる者も無く火は傾て我身の傍へ燃近づきければ所詮焼死ぬより外なしと思定めし所に長男馳来りて大いに驚き上に掩ひ重なりし木ども取除けんとするを秀平は止めて事既に急なり我を救はんとせば共に焼死なん早く腕を切捨てよと言へば何條父の身に刃を当られ候べきとて猶予ふ程に火益々迫りければ秀平は怒りて汝腕を切らずは父を焼殺すなり疾く切れと急がしける故に今は是非も無しとて思断りて腕切落とし父を火中に援け出しにけり此事君侯に聞えて假令父の身に刀を当つるとも一命を救ふ事道理なりとて米二人口を加増されけりとなん

(第三十六号 二十頁)

父親の一命を救うために、親に刀を向けざるを得なかつた息子の行為は、善行として扱われ、増俸が囿られるのである。

又産褥の困難なりしは亀戸町に亀田宗軒といへる庸医あり其妻が分娩に臨みたる時の地震なれば負はれて遁る事も尙ほず兎角する程に近隣に火起り煙室に滿ちければ妻が言ふ到底逃延ん事思ひも寄らず早く八歳の男子を連れ我を弄て、遁給へと申せば宗軒は悲みに堪へねども為ん術なくて泣々男子を連れて

遁れ出傍近き巷に踰路て我家の焼くるを見つ、弱草の妻籠る武蔵野の焼くる心地して我にもあらぬ所に隣の人来て汝の妻は火中を出て用水桶の水を飲居たり早く往きて助けよ言ふ宗軒は争でざる事あるべきとて信せざれば然らば我連れ来たらんと傾て背に負ひて来たるを見れば疑ひも無き我妻なりけりコハ不思議なり何として出でけるよと言へば小児は産落したれど為ん便なくて火中に残し我身は焼爛れながらに是迄来たりけるよと言ひけり其後治療して火瘡も愈にけりとそ

(第三十六号 二十一頁)

この逃げ後れて焼かれたはずの妻が、子を産み落として難を逃れ、九死に一生を得たという話は、「疑惑」の中に生かされている。玄道は、「風俗画報」を手にすることで誘発された「妻殺し」の疑惑に責め苛まれていた。それを、「あの場合妻を殺さなかつたにしても、妻は必火事の為に焼け死んだのに相違ない。さうすれば何も妻を殺したのが、特に自分の罪悪だとは云はれない筈だ。」と考えることだけで自分をこまかす事ができていた。しかし、梁の下敷きになり身動きできなかつた女が、火事によつて梁が焼け折れたため、抜け出すことができて助かつたという話を同僚から聞かされた時、そのわずか一条の血路さえも封じ込められてしまふのであつた。

このように読んでくると、大地震という状況下では、どのような事態でも起こり得るのが必定であり、日常的感觉からは異常

と思える話でも、必ずしも異常な逸話とは言えなくなる。日常が突然崩壊した時、異常性こそがその状況における常識と化するのである。そして、激しい愛や憎しみ、痛烈な悲しみや苦しみ、不安などが人々を襲い、日常生活の中でつづけている仮面を剥ぎ取ってしまう。従って、命からがら生き延びた人々の心の中には、黙して語る事の出来ない惨状が、深い傷として残っているに違いない。玄道は肉体的に欠陥のある妻を内心憎んでいた。芥川は「我々の心の底に潜む怪物」を暴露するために、公にはされることなかった恐ろしい体験を玄道に背負わせたのである。そして、それが日常生活の中で、徐々に露見して行く過程を描く。

『風俗画報』は、地震の描写にリアリティを与える根拠であつただけではない。そこには、地震という非日常的な極限状況の中での人間の生き様そのものが記録されていた。このような記事の掲載されている『風俗画報』を芥川が手にした時、彼自身にとつて重要なテーマの一つをそこに見出したとしても不思議ではない。芥川においては、「精神上的の敗残者」の心理を様々な時代や状況の中で描き出していく事が、重要なテーマであつた。『疑惑』は、『風俗画報』に出会つた芥川が、一切の社会的束縛が地上から姿を消す地獄という状況を借りて、このテーマを定着させた作品と考えられるのである。『疑惑』の前年に発表された『開化の殺人』、そして『奉教人の死』から、晩年の作品群に至る「精神上的の敗残者」をテーマとした流れの中に、『疑惑』を位置付ける事が出来るのである。

三

『疑惑』執筆から四年後の大正十二年、芥川自身も関東大震災に遭遇する。その際、大震災に関する一連の手記を残している。その中の一つが次に掲げる「大震災雑記」である。

これは夙にクライストが「地震」の中に描いた現象である。いや、クライストはその上に地震後の興奮が静まるが早いか、もう一度平生の恩怨が除ろに目ざめて来る恐ろしさへ捕いた。するとポプラー倶楽部の芝生に難を避けてみた人人もいつ何時隣の肺病患者を駆逐しようと試みたり、或は又向うの奥さんの私行を吹聴して歩かうとするかも知れない。それは僕でも心得てゐる。

「平生の恩怨が除ろに目ざめて来る恐ろしさ」について、『疑惑』の中で玄道をして「我々人間の心の底に潜んでゐる」怪物が居ります限り、今日私を狂人と嘲笑つてゐる連中さへ、明日は又私と同様な狂人にならないものでもございませぬ。」と語らせていた。罰の伴わない罪を重ねている人間の本心を、「怪物」と呼んでいたのであつた。しかし、『大震災雑記』の続く文中に、また、自分がそのような多勢の一人であることに、いつにない親しさの湧くのを、美しく忘れがたい光景とも表現している。

また、「大震災に寄せる感想」では、日常の崩壊を悲観的に見る

のではなく、逆に、そのような状況における確固たる人間の樹立について説いている。それは被害を受けた人にあてて書かれた文章であり、扇動的な要素が強く現れたものと考えられるが、芥川の生への強い執着を読みとる事ができる。多くの罪のために脚に傷を負いながら生きる輩であれ善良な市民であれ、ブルジョアジであれプロレタリアートであれ、天災は人を分かつたず火の手を上げる。地震の際、妻子を顧みず、屋外に飛び出していた芥川（「大震雑記」より）は、己のエゴイズムやエゴイストとしての人間を、冷笑しつつも甘受して行くのである。

また、「或阿呆の一生」の中では、「三十一 大地震」と題した一節の中に次のような文章がある。

殊に彼を助かしたのは十二三歳の子供の死骸だった。彼はこの死骸を眺め、何か羨ましそうに近しいものを感じた。「神々に愛せらるるものは天折す」——かう云ふ言葉なども思ひ出した。彼の姉や異母弟はいづれも家を焼かれてゐた。しかし彼の姉の夫は偽証罪を犯した為に執行猶子中の体だった。

「誰も彼も死んでしまへば善い」

彼は焼け跡に佇んだまま、しみじみかう思はずにはおられなかつた。

ここでは、己を束縛する者の死を望み、己を拘束する世界の崩壊を願う気持ちを吐露している。そこに芥川の精神の孤立、あるいは周囲との断絶を垣間見る事ができる。しかし、それによってし

か自らの生を保ち得ないのならば、また、それがかなえられない願望ならば、自らが死を選ぶより他はないのではあるまいか。

四

「疑惑」は、楊柳観音を背後にした実践倫理学者である「私」の前で、玄道が告白し、懺悔を行うという形になっていた。ここで、芥川の懺悔観から見た「疑惑」の手法について考察を加えてみたい。

芥川は晩年の作品において、懺悔ということについて、以下のように述べている。

四十六 懺悔

彼は彼の精神的破産に冷笑に近いものを感じながら、（彼の悪徳や弱点は一つ残らず彼にはわかつてゐた。）不変いりいろの本を読みつづけた。しかしルッソの懺悔録さへ英雄的な誠（まこと）にうち満ちてゐた。殊に「新生」に至つては——彼は「新生」の主人公ほど老獪な偽善者に出会つたことはなかつた。

（或阿呆の一生）

懺悔

古人は神の前に懺悔した。今人は社会の前に懺悔してゐる。すると、阿呆や悪党を除けば、何びとも何かに懺悔せずには娑婆（しやわ）に堪へることは出来ないのかも知れない。

又

しかしどちらの懺悔にしても、どの位信用出来るかと云うことはおのづから又別問題である。

トルストイ

ピユルコフのトルストイ伝を読めば、トルストイの「わが懺悔」や「わが宗教」の謔だつたことは明らかである。しかしこの謔を話しつづけたトルストイの心ほど傷ましいものはない。彼の謔は余人の眞実よりもはるかに紅血を滴してゐる。

(以上「保儒の言葉」)

七 懺 悔

わたしたちはあらゆる懺悔にわたしたちの心を動かすであらうが、あらゆる懺悔の形式は、「わたしのしたことをしないやうに。わたしの言ふことをするやうに」である。

(「十本の針」)

懺悔の形式の虚偽を見透かした上で、懺悔することの精神的な意味を認めようとしている。芥川にとつては、ルッソウの「懺悔録」も、島崎藤村の「新生」も、虚像であり偽善的である。しかし、懺悔に精神的な救済を求める多くの人々の心や、懺悔に心を動かされる人々、懺悔の嘘を知りつつ語り続けたトルストイの心痛そのものは、容認している。このような心痛や精神的な救済の中にこそ懺悔の意味があると考へてゐるのである。

「妻殺し」という罪が、自らの心の中で徐々に露呈されてくる

過程において、玄道の心は大きく揺らぎ続け、救いの手をさしおける余地もないほどであつた。玄道の意識している罪は、他人から糾弾される性質のものではなく、むしろ、どんなに正当化しようとしても正当化できない、人間であるが故に持っている罪である。それ故に、読者も黙然と座っているよりほかはなかつた「私」と同じ境地に置かれるのである。

芥川が「老獺な偽善者」と烙印を押した「新生」と比較してみると、主人公も読者も、全く逆の結末に導かれて行く。藤村の「新生」は、前篇が大正七年五月一日から十月五日まで、後篇が大正八年八月五日から十二月二十八日まで、「東京朝日新聞」に連載された。一方、芥川の「疑惑」は、大正八年七月に發表されている。また、「大正八年度の文芸界」(大正八年十二月五日発行、大阪毎日新聞社・東京日日新聞社編纂「毎日年鑑」掲載)において、芥川は「新生」を取り上げ、「叔姪の恋愛と云ふ如き大問題でありながら、『新生』の主人公の自己批判は、余りに容易なる憾がある。従つてこれを肯定しようとする主人公の心もも余りに虫が好すぎる観なきを得ない。」と酷評を下す。このような経緯から、周囲の保守的な体制に救われて自己の追求が十分に行われない「新生」へのアンチテーゼとして、「疑惑」が書かれたと見ることが可能になる。藤村の「新生」については、「島崎藤村氏の懺悔として観た『新生』合評」(大正九年一月発行「婦人公論」第五年第一号)が掲載されるなど、文壇に与えた影響は少な

くない。芥川は晩年において、「果たして『新生』はあつたらうか？」（『侏儒の言葉』）「『新生』読後」と疑問を投じているが、後篇発表を前にして、『新生』に抗していたのではなからうか。

芥川の『新生』批判について、山田晃氏論文に「人として」の失敗を「芸術家として」の成功で贖うという芥川の夢を大きく裏切るものを持った作品だ。のみならず、それは、芸術家としての権能を利用して、新たな罪悪が重ねられ、その上に人としての再生がはかられているという嫌疑を受けるに十分なものを「持っている」として、藤村の創作営為、あるいはそれを支える人格へのいらだちを指摘されている。また、菊池弘氏は、「実生活を切り捨てて虚構にテーマを託す芥川龍之介の小説方法は、私小説が育んだ告白形式に対立する姿勢を打ち立てたことになる」とされ、自然主義者たちのあり方、なかでも「藤村の芸術への態度と方法とは異次元のものである」と見ておられる。そして芥川の『新生』評については、芸術家を主人公にした「戯作三昧」（大正六年十一月完）、「地獄変」（大正七年五月）、「枯野抄」（同年十月）を挙げ、「芸術と倫理、芸術家とエゴイズムを作品を造型する中で追尋した。」という視点で考察されている。

更にここで、芥川の指摘した「主人公の自己批判」に注目すると、『新生』は、芥川の懺悔観と対立したが故に、『疑惑』を執筆することで自らの懺悔観を呈示しようとする動機付けの一つに

なったという感は強い。芥川は、自己を拘束するあらゆる状況や社会的規範、そして自分自身をも含めた人間の中に潜む生の虚偽性を看過できなかつたのである。生へのこだわりが強ければ強いほど、他者や自己の虚偽性を明確化させることになる。玄道は周囲の人から狂人呼ばわりされ、自らも「精神上の敗残者」になるよりほかない生を余儀なくされる。芥川にとって、トルストイの懺悔が「余人の真実よりもはるかに紅血を滴し」た嘘であつたように、徹底的に自己批判を行うことこそ、懺悔の意味はあつたのであろう。

『疑惑』は、大地震のような時空の裂け目とも言える中から造型されてくる世界を描いた作品であつた。玄道が遭遇する事件の一つ一つは、写実的なものでなければならず、そのため『風俗画報』という実録をもとに構成されたのである。部分部分の写実を積み重ねることで、非日常的非合理な世界が開かれるのである。芥川はそのような世界の造型にこそ、実在の空間は描かれるものと考へたのであろう。理由を作つて自己弁護することもできた玄道の仮面がごとごとく剥されていくのも、部分部分の写実に基づいている。『疑惑』は、芥川の罪意識や懺悔観が形成される過程において、重要な位置を占めるものであると同時に、芥川の小説の手法を考察する上にも意義深いものである。

芥川自身は、『疑惑』発表直後の大正八年七月八日付佐々木茂素宛葉書の中で、「悪作読む可らず」と書いている。芥川がなぜ

このように判断したかは、今では知る由もないが、『風俗画報』という資料と濃尾大地震という事実に頼りすぎたが故に、彼自身の中で十分に昇華しきれない面が多いということかもしれない。しかし、「精神上の敗残者」の告白を通じて人間の原罪に迫る方法は、まぎれもなく芥川の手法そのものである。その中で、特に懺悔観を追求した本作品は、芥川自身による評価はともかくとして、芥川の内面を深くえぐり出した作品であると言えよう。

注

注一 復刻版『風俗画報』（昭和四十八年六月二十三日、明治文献発行）に拠り、旧漢字は新漢字に改めた。

注二 山田晃氏論文「芥川龍之介と島崎藤村」（学燈社 昭和四十一年十月二十日発行『国文学 解釈と教材の研究』第十一卷第十四号所収）

注三 菊地弘氏論文「島崎藤村と龍之介」（至文堂 昭和五十八年三月一日発行『国文学 解釈と鑑賞』第四十八卷四号所収）

※ 芥川龍之介の作品及び文章は、一九七七一—一九七八年岩波書店発行『芥川龍之介全集』に拠り、旧漢字は新漢字に改めた。

（昭和六十年岡山大学院修了）